

京都部落問題 研究資料センター通信

第66号

発行日 2022年1月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

当資料センター主催「二〇二一年度差別の歴史を考える連続講座」の第三回から第六回を京都府部落解放センターで、一〇月一五日・二二日・二九日・十一月五日に開催しました。

講演要旨は次の通りです。詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第3回

大塩平八郎と被差別民社会

—大坂四ヶ所と渡辺村—

講師 藪田 貫さん

（関西大学名誉教授・大塩事件研究会会長）

天保八（一八三七）年二月、儒学者で元奉行所与力だった大塩平八郎は飢饉に苦しむ民衆を救うため、暴利を貪る豪商や救民策をとらない政治に憤慨して大坂で決起し、豪商たちを焼き討ちして奉行所に迫った。この「大塩の乱」には門人の与力たちや北河内の豪農、村民たち約二〇〇名が参加したが半日で鎮圧され、市中の二割が焼失した。乱の前日に大塩が江戸の老中にあてた書簡が近年見つかり、この事件が大坂町奉行所や豪商を攻撃するものではなく江戸幕府のあり方そのものを問う闘いであったことが明らかになっている。

大塩は、江戸時代の文化人としては珍しいほど身分制の最底辺の人たちとの接点を語る史料を残している。それは四ヶ所（天王寺・道頓堀・鳶田・天満）の非人たちが大坂の町や村の「風聞」（情報探索）を役目として行い、異変の情報奉行所に上げる仕組があったからである。上司の与力が町人と結託して起こした贈収賄事件などを摘発した大塩の功績は、この情報収集が元となったものである。一方で、儒学者としての大塩を慕った北河内の豪農たちからは、警察の役割をする非人たちの横暴なふるまいや悪徳与力と結託して贈収賄事件などを起こした長吏を取り締まってほしいとの願が出され、大塩は厳しい非人批判をしている。また、エタ村である渡辺村との関わりもあった。エタの頭を私宅に呼び飢饉で苦しいだろうと金子を渡し、「大坂市中に火の手が上がったら駆けつけよ」と指示している。また、大坂周辺のエタ村でも大塩の門人たちから施行金を貰い同じような指示をされている。実際には駆けつけることにはならなかったのだが、彼らの身分解放の願望を利用して乱の中の一員として動員しようと考えていたと思

われる。

市中に火の手を起こすという行為がこの乱の大前提にあり、施行を受けた貧民やエタたちを動員する点でも、江戸に送った書簡の意味を幕閣たちに気づかせるという意味でも「大塩の乱」の核心部分であった。

第4回

光州学生運動と京都・西洋

中学の朝鮮人学生

講師 堀内 稔さん

（むくげの会会員）

光州学生運動とは、光州で日本人中学生が朝鮮人女学生に侮辱的発言をしたことが発端となつて、一九二九年一月から翌年春にかけて朝鮮各地で展開された反日学生運動である。京都府私立両洋中学（現京都両洋高校）は、この闘争によつて退学や無期停学になり学校に戻れなくなった多くの朝鮮人学生たちを受け入れた。背景には排除学生の救済と共に入学者数の減少があった。当時の朝鮮語の新聞「朝鮮日報」「東亜日報」や官憲資料「社会運動の状況」、文部省学生部「鮮人学生生徒の思想的事件」などの資料から次のようなことがわかる。

一九三〇年、一〇〇名余りの朝鮮人学生が両洋中学に入学した。「朝鮮日報」には新入生歓迎会の写真が掲載されている。四月には「両洋朝鮮留學生親睦会」という組織が結成され、一〇月に開いた雄弁会では「日本帝国主義を打倒し：」といった過激な演説内容から警察官によって中止させられるという事件が起きている。一九三一年二月には、学校側の朝鮮人学生への侮辱、差別を原因とした朝鮮人学生の同盟休学事件が起きたが、学生たちの要求を受け入れて校長が謝罪することで解決した。しかし、五月に第二次同盟休学事件が起こる。原因には、京都朝鮮留學生学友会に参加したとの理由での二名の学生への停学処分と学費未納を理由に朝鮮人学生二八名が除名処分になったことがあげられる。朝鮮人学生たちは学費の値下げや除名学生の復学などを要求して同盟休学とデモを断行して闘争を続けたが学校側の態度は頑強で、学生の要求に応じることはなかった。校長の「彼らに告別の辞を伝えることになりました」との発言が新聞記事に載っている。

この同盟休学事件の結末についてはその後の新聞記事では取り上げられていない。官憲資料には「其後盟休ノ統制乱レ自然消滅ノ形トナリ九月ニ至リ登校スル者ソノ過半数ニ達す。(略)此等学生ノ多クハ在京都左翼朝鮮人学生共ト連絡ヲトリ、学生ノ左翼化ニ努メツアルヲ以テ今後尚注意ヲ要スル處ナリトス」と記されている。

第5回

滋賀の戦後部落史

『滋賀の同和事業史』の成果を踏まえて

講師 井岡康時さん

(奈良大学文学部史学科教授)

滋賀県の被差別部落は大部分が東海道・中山道などの旧街道に沿って点在し、そのため交通の便が良く周辺地域との交流が盛んな地域が多い。周辺からの厳しい差別はありながらも近世から経済的に安定した村が多く、明治以降は皮革や食肉などの産業が盛んになった地区では貧富の差が拡大し社会的問題となったが、概ね経済的には安定していたといえる。

一九二四年に滋賀県水平社が結成されるが、こうした特徴が背景となつて運動は広がらなかった。一方、行政と連携した融和運動は活発で生活改善の取組みは進んでいった。昭和戦前期に滋賀県嘱託の海野幸徳が提唱した小規模な隣保館を町村に作り部落内外の人々が交流して理解を深める「小善隣館主義」は県政に影響を与えた。これは現代にもあてはまる重要な提案であつた。

戦後の解放運動は、「滋賀県民主同盟」として始まった。一九四八年には差別発言を発端とする敷島紡績糾弾闘争に青年たちが立ち上がったが地域有力者の妨害により運動は崩壊する。その後、大火の際の補助金や隣保館建設をめぐる部落内での対立などがあり、部落解放運動としてまとまることはできなかった。

一方、行政は当初「同和事業を別段計上しない」という姿勢だったが、一九五二年の県会議員の差別発言をきっかけに行政と運動の合同組織「滋賀県部落対策協議会」が結成された。しかし県として施策を進めるには議会の同意を得られず、外郭団体の滋賀県社会福祉協議会に予算をつけて活動を進めた。県社協は部落問題解決のための様々な実態調査を行った。また、各同和地域に福祉推進員を常駐させ啓発活動や住民相談などの活動を積極的に行つた。これらの推進

員の多くは、後に解放運動のリーダーになつていく。運動の停滞や県民の理解が進まない中、県が県社協を活用して事態の打開を図ろうとしたのである。同対審答申以降は、国の方針がはっきりする中で滋賀県の同和対策は全国的な流れと共に進んでいくが、地域社会の合意を取りつつ穏健な方式で課題を解決しようとする滋賀県の姿勢は維持されていく。

戦後の滋賀県で培われた部落差別撤廃に向けた方式や地域文化を振り返ることで、今後の部落問題解決の道筋を考えていくきっかけとしたい。

第6回

感染症と差別

―一九九〇年代の巡回記録を読む―

講師

小林文広さん

(同志社大学教員)

一〇〇〇人程の死者がでて、感染症は非常に大きな影響を政治や社会に与えることになった。その後一八九〇年・一八九五年とコレラの流行が続くが、その後徐々に下水道などが整備されていきコレラによって亡くなる人は激減していく。

一八八六年、日出新聞は柳原庄（現崇仁地区）について「貧民の巢窟なるがゆゑ、常に不潔を極め而も人民頑愚執拗なる故、毫も他の言を用ひず、偶ま虎列刺の如き流行病あるも予防の法を知らず」と地域への偏見を煽りながらコレラ流行の恐れを書いた。実際は他地域と比べても患者が多く発生することはなかったのだが、これがこの時期のジャーナリズムの典型的なものであった。

感染症への対策として当初は患者を見つけて隔離する方法、一八八六年頃には患者の発生した町の出入りを規制する交通遮断法などがとられたが限界があった。そして一八九〇年代になって行われたのが感染症が起る前に消毒を奨励する消毒的清潔法だった。危険視されている地域に消毒をするという事で、予断や偏見に左右され、被差別部落を含む「貧民部落」、特定の地域に対する偏見を強める

役割を果たした。当時の医師たちの提言の項目には「避病院の新設」などと共に「貧民部落に大清潔法の施行」があげられていた。

一八九五年には医師たちによる市内の見回りが行われた。市内を巡回し料理店や露店の衛生状態を確認したり「貧民部落」の家々を視察している。「貧民部落」に対して医師らは当初偏見を抱いていたものと思われるが、実際に訪れると、井戸や便所、畳の下や床下まで隅々まで点検し客観的に記録した。致死率が非常に高いコレラに罹る可能性をいとわず家々や料理屋、湯屋などを視察したのである。その後にとめた意見書では、空気の流通、排水溝や塵芥、上水・下水、飲食物などについて詳細に言及をし、「貧民部落」をことさらに危険視するような項目は見られなくなった。様々な経験を経て衛生上の対策として本当に重要なことが見えてきたのである。

これらの経緯は、現在のコロナ禍での差別やエッセンシャルワークの重要性を考える上で大きな手掛かりとなるものである。

本の紹介

リチャード・シドル著

『アイヌ通史 「蝦夷」から先住民族へ』

小川正人

(北海道博物館)

1 京都と「アイヌ史」

本書の人名索引の中に「小川佐助」の名がある。この索引によれば、本書に、小川佐助の名は八ページにわたって記載されており、アイヌ史にとって重要な人物の一人だと窺える。小川佐助は一九〇五年、北海道日高地方浦河の生まれ

部であり、競馬界での活動の場は栗東や淀だった。評者が嘗て聞き取り調査をさせていただいた中でも、或る方が「淀で小川さんに声をかけていただいてね……」と懐かしそうに語って下さったことがある。

いわゆるアイヌ文化・アイヌ史の中では、社団法人北海道アイヌ協会の創設（一九四六年）時の常務理事であり、財団法人アイヌ無形文化伝承保存会の創設（一九七六年）にあたり法人の基本財産を抛出し初代会長をつとめた人物として知られる。

小川佐助の主な社会的活動の場の一つは、京都だった。彼は競馬の騎手、のち調教師となり、日本調教師会や中央競馬会の役員をつとめたが、彼が一九三四年に騎手免許を取得したのは京都競馬倶楽

このような個人の例を挙げるまでもなく、京都に本山を置く仏教の宗派の、北海道などでの布教におけるアイヌ民族との関わり（例えば、浄土真宗本願寺派の寺院が、樺太から北海道に移住を余儀なくされた人々との長いゆかりを持つてきた歴史や、大谷派の僧侶が北千島から色丹島への移住を余儀なくされた人々に対する「教化」のために派遣された歴史など）や、京都帝国大学・京都大学なども参画した、いわゆるアイヌ研究の問題など、アイヌ民族と（京都）の関わりの具体例は枚挙に暇が無く、

かつ現在進行形でもある。

また、二〇〇一年に三〇回にわたり『京都新聞』に連載された「チュプチセコルさん」を考える日本のなかのアイヌ像」を覚えておられる方も少なくないと思う。京都に生まれ育ち、京都で暮らしたアイヌ・チュプチセコル（チュプチセコルは筆名）が問い続けたのは、「日本」という社会が当たり前のように「創造」し或いは享受している、マンガ、アニメ、映画、ドラマ、小説、ゲーム等々が描いてきた（アイヌ）像のあり方であり、「アイヌ民族から遠く離れた」地であると思ひ込まれがちな京都や関西、首都圏こそアイヌ民族に対する多数者のイメージを醸成する、まさにその「現場」であり、「当事者」はここにいて、ということだったと思う①。

本書はもちろん、小川佐助の活動を紹介し、その発言を検討する。京都帝国大学・京都大学の名は挙げられないものの、アイヌ研究の問題には相当の紙幅を割いている。チュプチセコルへの直接の言及は無いが、日本社会におけるアイヌ民族の表象のあり方、特に、近代

から現代へと人々の出自がいつそう多様化していくにも関わらず、日本社会の認識は、伝統や文化、歴史への帰属意識にもとづく民族的出自の多様性を受け止める方向も見られるものの、「血筋」に拘泥する（「人種」の概念に囚われている）傾向も根強い状態を批判的に抉出しようとする視点は、本書に一貫していると思う。本書が、各地の人々に読まれることを望む。

2 本書の概要

改めて、本書の概要を紹介する。本書は、リチャード・シドル (Richard Siddle) 著『Race, Resistance and the Ainu of Japan』(Routledge, 一九九六) の日本語版である。全訳に当たり、著者が二〇〇二年に発表した論文が補章として付加され、さらに著者の「日本語版への序文」、そして翻訳者であるマーク・ウィンチェスターによる「訳者解題」のほか「訳注」「付録」などが付された。本書の主要な構成は次のとおりである。

第一章 「人種」、エスニシティ

とアイヌ（近代日本における「人種」と国民／先住民族、創られたインディアン―競合する歴史）

第二章 夷人と鬼（初期の表象／松前藩／夷人を教化する―蝦夷地における幕府／犬と人間／一九世紀のアイヌの表象）

第三章 旧土人（蝦夷地の変貌―異域から内国植民地へ／開拓と移民政策／初期のアイヌ政策と強制移住／一八九九年の北海道旧土人保護法）

第四章 滅びゆく民族（学者たち／役人と教育者／「滅びゆく民族」の表象）

第五章 瞳輝く―アイヌの抗議と抵抗（一八六九年―一九四五年）

（初期の対応と対抗／アイヌと大正デモクラシー／教師と詩人とキリスト教徒と―アイヌの社会運動（一九一八年―三〇年）／アイヌ協会とアイヌの活動の体制への取り込み／他のアイヌの運動―近文と樺太／旧土人保護法の改正）

第六章 アイヌ解放と福祉植民地主義―新しいアイヌの政治と国家の反応（アイヌ協会の再興／

高度経済成長期におけるアイヌ／「人種」と戦後日本におけるアイヌ／新しいアイヌの政治と国家の反応）

第七章 自らのために歩み始める―アイヌ民族の出現（アイヌの民族性の奮起／アイヌ新法―新しいネーションのための新しい法律／結語―一九九〇年代におけるアイヌ）

補章 画期的な出来事か―一九九七年のアイヌ文化振興法とその影響（アイヌ文化振興法の系譜／アイヌ文化振興法と文化とアイデンティティ／アイヌ文化振興法後のアイヌの政治／結論）

あとがき
訳者解題
参考文献
付録

各章・節の表題を通覧するだけでも、本書がアイヌ民族の歴史を現代・現在に引きつけて考えるに当たっての重要な史実や論点を多く取り上げていることが窺えると思う。

評者なりの大雑把な整理になるが、第一章が本書全体の序章に当

たり、第二章は古代から近世を、主に和人の側のアイヌ認識に即して素描する。

第三章は近代のとは口にあたる時代（日本史という幕末維新期、アイヌ史においては自分たちが暮らしてきた大地が日本またはロシアの領土に編入される時期から、一九世紀末の、日本国内におけるアイヌ民族に対する「保護」をうたった法制度の成立まで）の歴史過程を対象とし、第四章は、第三章に続く時代（おおよそ一九三〇年ごろまで）を対象に、著者の言葉を借りれば「アイヌの人種化」(the racialization of the Ainu) すなわち「いかにしてアイヌが「人種」という色眼鏡を通して認識されるようになったのか、またこうした認識が不平等な関係を構造化していくのにいかに役立ったかを検討する」ことを課題に据え、研究（研究者）、教育（教育者）、政策・行政（行政官）や各種のメディア、博覧会、観光などの、〈人〉の活動と言説、具体的な場面におけるアイヌの表象のされ方を検討する。第二、三、四章は、各章のタイトルがそれぞれの時代

のアイヌ表象を端的に示すかたちになっている。

第五章は、著者が章の冒頭で「ここまでの章では、植民地秩序の下でアイヌがどのように「形成された」のかを述べてきた。」と第四章までの自身の視点を押さえた上で、「ここから本書の焦点は、アイヌの対応についての検討に移行する」と述べたとおり、一八六九年から一九四五年までを対象として、アイヌ民族による「抗議」や「抵抗」を主題に据える。本章の主題にある「瞳輝く」は、章のとびらに写真を掲載した、アイヌの歌人として知られる、そして本章の主要な登場人物でもある遠星北斗が詠んだ短歌「滅び行くアイヌの為に起つアイヌ遠星北斗の瞳輝く」によるものだろう。第五章は、こうしたアイヌ民族の言論や活動を検討しつつ、政府・行政がそれらへの対応としての意味も含めて措置した一九三七年の「北海道旧土人保護法」改正とその後動きを検討して締め括られる。

の時期である一九九〇年代半ばごろまでの、アイヌ民族の動きを主題としている。補章は、原版出版後の二〇〇二年に発表された論考であり、原版出版の翌年、一九九七年に制定・施行されたいわゆるアイヌ文化振興法を主題に、同法制定後の動きも含め、二〇世紀末から二一世紀初頭におけるアイヌ民族の運動と同法の影響を論じる。

3 本書の特色と魅力

本書は、訳者によって（おそろく、敢えて）「アイヌ通史」との日本語表題が付された。確かに、訳者が「英語圏初の本格的なアイヌの通史書」と評するとおり、本書は、アイヌ史に対する著者ならではの通史的な視野のもと、特に著者が重点を置いた近現代については、著者が自ら多くの一次資料を調査し分析した知見により組み立てられている^⑥。本書原稿が刊行された一九九六年時点で、公刊されていたアイヌ史の通史は、榎森進『アイヌの歴史』（三省堂、一九八七年）や新谷行『アイヌ民族抵抗史』（三一書房（三一新書）、一九七二年）など僅かであって、

本書の近現代史の記述は、それらに比べ、基礎的史実の把握と、後述する著者の視点において、「アイヌ通史」としての特色と意義を有していると評者は思う。

だが、本書のより大きな特色と魅力は、「2」でも触れた著者の視点である。著者が本書においてこの視点を貫いて、本書における「第一のテーマ」（序・xviページ）としてアイヌ民族に対する周囲の認識において根強い「人種」観念の分析を、「第二のテーマ」（同、xviiページ）として、「従属化に対するアイヌの対応」「支配的なイメージに挑戦する闘い」「自らを民族的コミュニティとして再構築する闘い」を捉え、検討していく作業を掲げたことに、本書の基盤があると評者は考えている。

「アイヌ民族に対する差別的な観念や施策と、それに対するアイヌの抵抗や自立」という枠組みは、今日ではむしろ多くの時論に見られるものだと感じられるかもしれない。だが本書は、前者（第一のテーマ）については、「人種」という観念の広範な存在に着目することによって、アイヌ史と植民地

主義という世界史的な経験とを通底させる回路を獲得している。そして「アイヌ民族の復興運動支持」と称する人々においてさえ、文化、歴史や伝統に対する自己意識が「民族」の基底なのだと学んでもなお、無意識のうちに「血筋」を前提とする「人種」の観念がまわりつく（アイヌ民族の話題になると「混血」の度合いを問うような質疑やコメントが出るのは、この観念と無縁ではないはずだ）傾向を捉えることが可能になっていると評者は思う。

そして後者（第二のテーマ）についても、第一のテーマとの関わりを意識するからこそ、アイヌ民族の「保護」を正当化する周囲の観念の強固さの中でアイヌ民族の意思を捉えようとする姿勢に繋がっていると評者は思う。そのような意味で、著者は本書ならびに本書に通じる一連の研究において、文字通り真摯に、アイヌ民族の現在、という課題に対峙していると評者は感じている。

そしてこれは、「2」で述べた本書の構成の特色——通史的な構成をとりつつ、第四章までと、第

五章以降とで敢えて視点を動かす方法などにも反映していると評者は受け止めている。一般的な通史ではない、著者がこだわり続けた視点と方法が、本書の魅力だと思う。

4 さらに本書を読み、考えるために

本書には、著者による詳細な原注のほか、訳者による、やはり詳細な訳注と本書についての解題、さらに一九九九年（おおよそ本書補章の対象時期に当たる）から現在（本書刊行直前〇二〇二一年六月）までの「アイヌ現代史・政治関係年表」や、付録として主要な法令などが収録されている。いずれも、本書の内容の理解を助けるばかりでなく、アイヌ近現代史を知り・考える手がかりになる。

訳者であるマーク・ウインチェスター氏は、自身が近現代アイヌ思想史を専攻し、既に多くの論考を発表し、特に排他的・人種主義的なアイヌ民族差別やアイヌ民族の存在そのものを否定しようとする論調との対峙が続いている^③。何より彼の指導教員は本書の著者である。

本書は、原板刊行から四半世紀を経てようやく日本語版の刊行に至った。評者は、自身も近代アイヌ史を学ぶ者として、本書の訳出に挑んでこなかったこと、本書をいわゆる日本語圏の中でほとんど論評しないままに過ごしたことを、著者にたいへん申し訳なく思う。その上でのことなので、まことに烏滸がましいが、本書は本書にとつて最良の訳者を得て、いま刊行されることになったと思っている。

なお本書については、既に戸邊秀明氏（『朝日新聞』二〇二一年一月九日付け書評欄）、石原真衣氏（『図書新聞』二〇二二年一月一日付け第三五二六号）らによるすぐれた書評があり、それぞれに本書の意義を語り、さらにそれぞれの思索を深めている。評者もこれらの先行する書評から多くを学び、示唆を得た。

本書が、多くの方々に読まれることを望み、ここに紹介させていただいた。末筆ながら、本稿の掲載を認めてくださった方々に深く感謝申し上げます。

注

① 北原モコットウナシ「京に広がる息づくアイヌ文化」『京都新聞』二〇二〇年五月二十九日付け（評者は<https://kyoto-np.co.jp/article/as/-/261099>で確認した）もぜひ参照されたい。

② これには、北海道教育大学に学んだ著者を指導したのが、北海道史の大家（この言葉は、この人のためにあると評者は思う）である田端宏氏であったこと、著者が、優しいが決して甘くはない田端の指導を正面から受け止め続けたことが大きかったと評者は考えている。

③ 岡和田晃との共編『アイヌ民族否定論に抗する』（河出書房新社、二〇一五年）はその過程で編まれた論集である。

（岩波書店刊、二〇二一年七月、五三〇〇円＋税）



の経験から 古川正博

リレーエッセイ 水平社100年に想う 10 マジョリティとしての責任—なぜ私が反差別運動に取り組むか 宮下萌
春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 14
「特措法」の限界と「部落解放基本法」制定運動の展開 谷元昭信

部落解放研究 215 (部落解放・人権研究所刊, 2021. 11) : 2,000円

特集 識字運動をめぐる「人権」対「新自由主義」

朝鮮の被差別民「白丁」の近代 趙景達

鈴木祥蔵の幼児教育・保育論における人間学的前提 吉田直哉

書評 山内民博著『戸籍からみた朝鮮の周縁—17—19世紀の社会変動と僧・白丁—』 矢野治世美

部落解放研究くまもと 82 (熊本県部落解放研究所刊, 2021. 10)

隣保館から見る部落問題—各地の現状と課題— 山本崇記

私の解放運動—「私の子どもに光をあてないでください。」

私の子どもを光にしてください— 村田美矢子

『同和』教育は、日々是好日～部落問題との出会い直しをライフワークに～ うんのまなぶ

種子島流人漂流一件 (その1) 矢野治世美

部落解放ひろしま 104 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2022. 1) : 1,000円

特集 小森龍邦さんを偲んで～私たちが受け取ったメッセージ

宗教と部落問題 「是旃陀羅」をめぐる大谷派の動き 阪本仁

部落問題研究 238 (部落問題研究所刊, 2021. 9) : 1,163円

一九一〇年代の貯蓄奨励運動と被差別部落—京都市東三条の事例を中心として— 佐々木政文

戦前の統計等に見る児童救済の実態—東京及び東京以外の全国の間存在した棄児をめぐる救済格差問題の変遷— 大杉由香

戦後同和教育の遺産としての人権教育考 森田満夫

研究ノート：大坂「千日墓所一件」に見える心中 塚田孝

声明 ジョン・マーク・ラムザイヤー氏の部落問題に関する論文について 部落問題研究所理事会・研究委員会

本願寺史料研究所報 61 (本願寺史料研究所刊, 2021. 9)

近世の本願寺、その日その日 左右田昌幸

密教学 57 (種智院大学密教学会刊, 2021. 3)

近世の本願寺、その日その日—正月行事の御節・御囃子の中断と復興— 左右田昌幸

良き日のために 25 (日本基督教団部落解放センター刊, 2021. 12)

部落解放センター40周年 小柳伸顕さんインタビュー

リベラシオン 183 (福岡県人権研究所刊, 2021. 9) : 1,320円

松本治一郎・井元麟之研究会 資料紹介 松本治一郎旧蔵資料 (仮) 紹介 4—吉竹浩太郎から松本治一郎への書簡— 塚本博和

川向秀武先生の「最期」と年譜、教育・研究実績—川向秀武氏のライフ・ストーリーの最後として— 板山勝樹
民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 43 「ひえもんとり」の周辺 10 石瀧豊美

ルシファー 24 (水平社博物館刊, 2021. 10)

企画展「夜間中学生 学ぶこと、それは生きること」を開催して 駒井忠之

特別展「柏原の三青年—彼らの熱と光—」を開催して 佐々木健太郎

公開講座報告

夜間中学と文部省の「改心」 前川喜平さん／柏原の三青年—彼らの熱と光— 佐々木健太郎

和歌山研究所通信 74 (和歌山人権研究所刊, 2021. 11)

京都大学による琉球人差別を訴える—学知の植民地主義との闘い— 松島泰勝

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 35 川部昇
地域と人権京都 849 (京都地域人権運動連合会刊, 20
21. 11. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 36 川部昇
地域と人権京都 850 (京都地域人権運動連合会刊, 20
21. 12. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 37 川部昇
地域と人権京都 851 (京都地域人権運動連合会刊, 20
21. 12. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 38 川部昇
であい 714 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 9) : 1
60円

在日朝鮮人集落ウトロの闘いの社会的意味と現在までの
到達点 斎藤正樹

人権文化を拓く 286 価値のない人間はいない 倉田哲也
であい 715 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 10) :
160円

人権文化を拓く 287 1985年、夏。オレたちもセン公も
アツかった 寺脇研

であい 716 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 11) :
160円

人権文化を拓く 288 『屠畜のお仕事』 (解放出版社)
を出版して 栃木裕

ヒューマンライツ 403 (部落解放・人権研究所刊, 20
21. 10) : 550円

特集 ネット上の差別解消へ法整備を!

識字運動の担い手たちが語る 10 「文集は、いい思い出。
うまいこと書いてる」前編 藤本澄子さん (西郡識字教
室 (いずみの会)) 編集: 森実

追悼 現実主義者で人情家の秋定嘉和さんを偲んで 寺木
伸明

ヒューマンライツ 404 (部落解放・人権研究所刊, 20
21. 11) : 550円

特集 差別被害に対する相談・救済・支援のいま

識字運動の担い手たちが語る 11 「文集は、いい思い出。
うまいこと書いてる」後編 藤本澄子さん (西郡識字教
室 (いずみの会)) 編集: 森実

追悼 今木誠造さんを追悼して 新保真紀子

ヒューマンライツ 405 (部落解放・人権研究所刊, 20
21. 12) : 550円

特集 東京オリンピック・パラリンピックと人権

識字運動の担い手たちが語る 12 生き方をかえた識字学
級 (前編) 中村美智代さん (宝塚市立第一隣保館) 編
集: 小原武次郎

ひょうご部落解放 180 (ひょうご部落解放・人権研究
所刊, 2021. 9) : 990円

特集 アートと人権

コロナ禍で考える差別人権～博物館・資料館の変質を考
える 栗山和久

部落解放 812 (解放出版社刊, 2021. 10) : 1,000円

特集 解放教育 学校を変える被差別マイノリティの子ど
もたち 8

部落解放 813 (解放出版社刊, 2021. 11) : 600円

特集 部落問題学習の歴史と現状

部落問題学習の「いま」を考える 上 私の現役教員時代
の経験から 古川正博/大学生の部落問題学習経験 関西
大学社会学部「差別と社会1」受講生の回答から 内田龍
史/部落の地名・人名をどう扱うべきか 大学教育と歴史
研究をめぐって 廣岡浄進/部落問題学習にとって当事
者とは何者か 声を聴き、対等な出会いをめざして 澤
井未緩

小特集 差別戒名の発覚から45年 今 (中) 僧侶の社会的
責任を放棄せず、問う 我孫子高宏/反省・懺悔であり、
宗祖の教えへ立ち返る取り組み 浄土宗人権センター
リレーエッセイ 水平社100年に想う 9 「水平社宣言」、
そして子どもたちと向き合う今 山崎秀子

被差別部落地名の公開は「違法」 出版禁止とサイト削
除を命令 「全国部落調査」復刻版出版事件裁判 編集部
西光万吉文化・平和活動奨励賞創設 編集部

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 13
部落解放運動が胎藏していた社会変革への可能性と限
界 3 谷元昭信

部落解放 814 (解放出版社刊, 2021. 12) : 600円

特集 ダーバン会議20年 人種差別との闘いは進んでいる
のか

本の紹介 小柳伸顕著『釜ヶ崎現場ノート 1975年～2007
年』 加藤昌彦

小特集 差別戒名の発覚から45年 今 (下)

「差別戒名」についての学び直しを 雨貝覚樹/「差別
法名 (戒名)」の反省をし、「法名の本来化」に取り組
む 宇野哲哉

部落問題学習の「いま」を考える 下 私の現役教員時代

小森龍邦『わが闘魂の半生』30

解放新聞広島県版 2408 (解放新聞社広島支局刊, 2021.12.15)

小森龍邦『わが闘魂の半生』31

語る・かたる・トーク 320 (横浜国際人権センター刊, 2021.10) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 前へ、前へ 吉成タダシ

部落史 学び直し 問い直しのススメ 7 教えないことは差別に加担すること 外川正明

語る・かたる・トーク 321 (横浜国際人権センター刊, 2021.11) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「やらないよりは」 吉成タダシ

部落史 学び直し 問い直しのススメ 8 「部落史の見直し」と出会って 外川正明

関西大学人権問題研究室紀要 82 (関西大学人権問題研究室刊, 2021.8)

高い感性をもつ人 (Highly Sensitive Person) の学校適応感—回想調査による予備的検討— 串崎真志

多セクターとの共創による包摂型地域コミュニティ生成—高槻市富田地区大阪北部地震後のコミュニティ再生の取り組み 1— 岡本工介

部落差別解消推進法第6条に基づく部落差別実態調査の意義と課題 内田龍史

子ども虐待と「新しい社会的養育ビジョン」にみられる社会的養護 北村由美

神戸の闇市をめぐる主体と市街地形成 村上しほり

江戸時代の心中と裁判 藤原有和

グローブ 107 (世界人権問題研究センター刊, 2021.10)

人権の一視点～主体性の尊重～ 障害のある人の芸術活動 重光豊

ツラッティ千本～人権資料展示施設の未来～ 北條昌代

国際人権ひろば 160 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2021.11)

特集 多様性 (ダイバーシティ) が実現する社会とは

人権と部落問題 953 (部落問題研究所刊, 2021.11) : 660円

特集 子どもの権利を守れ—コロナ禍に抗して—

文芸の散歩道 土方鉄著 物語『人間の血はかれない』と小説『地下茎』—「部落民としての肉体」の描写を主張

する出身作家の「明」と「暗」 桑原律

八鹿高校事件から半世紀 第1章 八鹿高校事件の舞台と全体像 2 「解同」丸尾派の「糾弾」の実態 東上高志

写真で見る水平運動史 8 三 連帯の広がりとは政治闘争 8 「三角同盟」—共同闘争の展開— 尾川昌法

人権と部落問題 954 (部落問題研究所刊, 2021.12) : 660円

特集 高校教育が変わる

写真で見る水平運動史 9 三 連帯の広がりとは政治闘争 9 軍隊内差別糾弾闘争と第1回普通選挙 尾川昌法

文芸の散歩道 池波正太郎の作為 (アレンジ) —「さざ浪伝兵衛」より— 小原亨

八鹿高校事件から半世紀 第1章 八鹿高校事件の舞台と全体像 3 部落問題における兵庫県の位置 東上高志

振興会通信 160 (同和教育振興会刊, 2021.9)

同朋運動史の窓 66 左右田昌幸

振興会通信 161 (同和教育振興会刊, 2021.11)

同朋運動史の窓 67 左右田昌幸

月刊スティグマ 303 (千葉県人権センター刊, 2021.10) : 500円

「福田村事件」98年の記憶 市川正廣

先人からのメッセージ～碑に刻まれた災禍の記憶～ 阿部治樹

月刊スティグマ 304 (千葉県人権センター刊, 2021.11) : 500円

差別とは何か、偏見とは何か 7 福岡安則

月刊スティグマ 305 (千葉県人権センター刊, 2021.12) : 500円

差別とは何か、偏見とは何か 8 福岡安則

月刊地域と人権 450 (全国地域人権運動総連合刊, 2021.10)

全国水平社創立百周年 部落解放運動100年の歴史 5 丹波正史

地域と人権京都 846 (京都地域人権運動連合会刊, 2021.10.1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 33 川部昇

地域と人権京都 847 (京都地域人権運動連合会刊, 2021.10.15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 34 川部昇

地域と人権京都 848 (京都地域人権運動連合会刊, 2021.11.1) : 150円

収集逐次刊行物目次 (2021年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

愛生 834 (長島愛生園刊, 2021. 12)

コロナ禍に触発されて、ハンセン病啓発活動の今までとこれからを考える 山本典良

アイユ 364 (人権教育啓発推進センター刊, 2021. 9)

インタビュー 福祉と人権のまちづくりを目指して 全国隣保館連絡協議会結成から50年 谷広巳

部落差別と結婚差別 9 「Kakekomi寺…結婚差別」ネットワークの取組 9 大賀喜子

ウトロ地区の歴史とウトロ平和祈念館の意義 金秀煥

アイユ 365 (人権教育啓発推進センター刊, 2021. 10)

部落差別と結婚差別 10 「Kakekomi寺…結婚差別」ネットワークの取組 10 大賀喜子

アイユ 366 (人権教育啓発推進センター刊, 2021. 11)

部落差別と結婚差別 11 「Kakekomi寺…結婚差別」ネットワークの取組 11 大賀喜子

明日を拓く 131 (東日本部落解放研究所刊, 2021. 11) : 1,000円

特集 若手研究者が取り組む部落問題・差別問題

古文書を楽しむ 11 父助命のため町奉行所への駆け込み訴え 古文書を読む会

書評 浪川健治著『北の被差別の人々「乞食」と「革師」』 鳥山洋

IMADR通信 208 (反差別国際運動刊, 2021. 11)

特集 アフガニスタンの人権

ウイングスきょうと 166 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2021. 10)

図書情報室新刊案内

アイリス・ゴットリーブ著『イラストで学ぶジェンダー

のはなし みんなと自分を理解するためのガイドブック』

／はらだ有彩著『女ともだち ガール・ミーツ・ガールから始まる物語』

ウイングスきょうと 167 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2021. 12)

図書情報室新刊案内

青弓社編集部編著『「テレビは見ない」というけれどエンタメコンテンツをフェミニズム・ジェンダーから読む』／阪井裕一郎著『事実婚と夫婦別姓の社会学』

解放新聞 3006 (解放新聞社刊, 2021. 10. 25) : 115円

「全国部落調査」復刻版出版事件裁判東京地裁判決で原告・弁護団が声明 (全文)

解放新聞 3007 (解放新聞社刊, 2021. 11. 5) : 115円

本の紹介 吉村智博著『大阪マーガナルガイド』 安田耕一

解放新聞 3009 (解放新聞社刊, 2021. 11. 25) : 115円

追悼 秋定嘉和先生 黒川みどり

解放新聞 3010 (解放新聞社刊, 2021. 12. 5) : 115円

本の紹介 浪川健治著『北の被差別の人々「乞食」と「革師」』 水本正人

解放新聞東京版 1008 (解放新聞社東京支局刊, 2021. 11) : 110円

東京の同和教育のあゆみ 1 松浦利貞

解放新聞広島県版 2401 (解放新聞社広島支局刊, 2021. 10. 5)

小森龍邦『わが闘魂の半生』29

解放新聞広島県版 2402 (解放新聞社広島支局刊, 2021. 10. 15)

事務局よりお知らせ

◇「2021年度差別の歴史を考える連続講座」が無事に終了しました。3月末には講演録を発刊予定です。ご希望の方は下記までご連絡下さい。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032 □E-mail qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～水曜日・金曜日・第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅 (京都駅より約10分) 下車 北へ徒歩5分